

キャンプ指導経験が大学生の仮想的有能感に及ぼす影響

戸田 耕介 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 黒澤 毅

キーワード: キャンプ指導経験, 仮想的有能感, 現実的有能感

1. 緒言

速水ら²⁾は、現代の若者世代の特徴として他者を軽視し自己の有能感を高めようとする仮想的有能感の存在を示唆している。この仮想的有能感は「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価・軽視する傾向に付随して習慣的に感じる有能さの感覚」と定義される。これまで仮想的有能感について、キャンプ指導者を対象にした研究はない。そこで本研究は、キャンプ指導経験が大学生の仮想的有能感に及ぼす効果とその要因となったキャンプ中の体験を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

【被験者】2015年7月～8月にかけて実施されたAキャンプ(2泊3日)、またはBキャンプ(3泊4日)にカウンセラーとして参加した大学生5名(男性4名、女性1名)を対象とした。またキャンプに同行した責任者にカウンセラーのソフトスキル(以下:SS)の評価を依頼した。

【調査方法】他者軽視因子(ACS-2¹⁾)と過大評価因子(SS評定尺度³⁾)を仮想的有能感尺度とした(20項目)。また自尊感情尺度⁷⁾、自己肯定意識尺度⁴⁾、一般性自己効力感尺度⁵⁾を現実的有能感尺度とした(15項目)。いずれも質問紙を筆者が独自に加筆、修正し作成した。カウンセラーの過大評価をみるため、カウンセラーと責任者それぞれに、SS自己評価尺度とSS客観評価尺度(共に12項目)を筆者が独自に作成して用いた。また、調査は毎日の活動後に評価を依頼した。得点の分析はwilcoxonの符号付順位和検定を使用を行った。さらに、キャンプ中の仮想的有能感の変容要因、およびキャンプ後の仮想的有能感について明らかにするため、筆者が独自にふりかえりシートを作成し、毎日の活動後とキャンプ2ヶ月後に記入を求めた。

3. 結果と考察

大学生の他者軽視得点は低下した($z=-1.841^*$)。またSS得点は、自己評価得点は向上せず($z=-1.219^{n.s.}$)、客観評価得点は向上が見られた($z=-2.032^*$)。すなわち、過小評価となった。また現実的有能感得点に変化は認められなかった($z=0.674^{n.s.}$)。しかし自尊感情得点は向上した($z=-1.656^*$)。

これらの結果を受け、各被験者から得られたデータをグラウンデッドセオリーアプローチ⁶⁾を用いて要因分析を行った。以下に、大学生のキャンプ経験による仮想的有能感の低下プロセスを示し、図1を作成した。『キャンプ指導経験』は『他者との関係』、『自己のスキル認知』、『自己フィードバック』に分類でき、全てに『ポジティブ経験』、『ネガティブ経験』が見られた。それを基に『自己へのふりかえり』を行い『自信の獲得』、『できない自分を受容』へつながり、仮想的有能感は低下していった。また、『自己へのふりかえり』は『次への課題設定』へ向けたふりかえりも含んでおり、再びキャンプ指導経験を繰り返す。この経験を自然環境の中で繰り返すことこそ、最も重要な仮想的有能感の低下要因と示唆される。特に他者軽視は、他者の新たな姿を知ったことなど、他者との関わりの経験が低下の要因とみられた。過大評価は、指導への不安から自己評価が向上せず過小評価となったとみられた。また現実的有能感が向上しなかった要因として『プログラム特性』、『自己の指導への不安』、『成長実感の機会が稀少』が見られたが『プログラムでの課題克服』、『他者からの承認』など向上と取れる要因も見られたことから現実的有能感はキャンプ中に向上と低下を繰り返していることがわかった。

【調査方法】他者軽視因子(ACS-2¹⁾)と過大評価因子(SS評定尺度³⁾)を仮想的有能感尺度とした(20項目)。また自尊感情尺度⁷⁾、自己肯定意識尺度⁴⁾、一般性自己効力感尺度⁵⁾を現実的有能感尺度とした(15項目)。いずれも質問紙を筆者が独自に加筆、修正し作成した。カウンセラーの過大評価をみるため、カウンセラーと責任者それぞれに、SS自己評価尺度とSS客観評価尺度(共に12項目)を筆者が独自に作成して用いた。また、調査は毎日の活動後に評価を依頼した。得点の分析はwilcoxonの符号付順位和検定を使用を行った。さらに、キャンプ中の仮想的有能感の変容要因、およびキャンプ後の仮想的有能感について明らかにするため、筆者が独自にふりかえりシートを作成し、毎日の活動後とキャンプ2ヶ月後に記入を求めた。

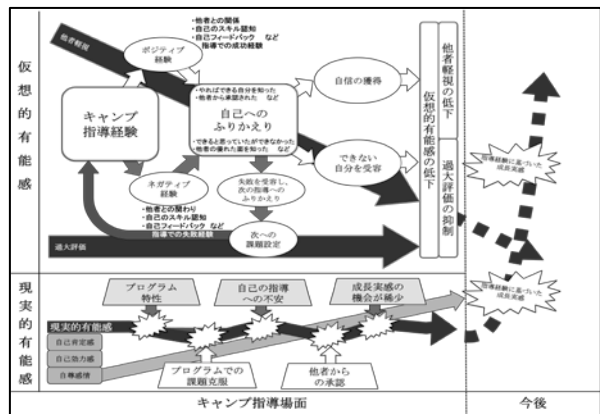


図1 大学生のキャンプ指導経験による

仮想的有能感の低下プロセス

4. まとめ

大学生のキャンプ指導経験による仮想的有能感の低下プロセスは、キャンプ指導経験に伴うポジティブ経験とネガティブ経験を自己へのふりかえりにつなげることが最も重要であることがわかった。

引用文献

- 1) Hayamizu, Kino, Tagaki, Tan (2004): Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: focusing on anger and sadness, Asia Pacific Education Review, Vol. 5 (2), pp. 127-135
- 2) 速水敏彦, 木野和代, 高木邦子 (2004): 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達 51, pp. 1-8
- 3) 土方圭 (2004): キャンプカウンセラーのソフトスキル評定尺度の開発, 野外教育研究 7 (2), pp. 23-34
- 4) 平石賢二 (1990): 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) - 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討, 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学学科 37, pp. 217-234
- 5) 坂野雄二 (2002): セルフエフィカシーの臨床心理学, 北大路書房, p. 7
- 6) 戈木・クレイグヒル・滋子 (2010): グラウンデッド・セオリー・アプローチ実践ワークブック, 日本看護協会出版会
- 7) 桜井茂男 (2000): ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討, 筑波大学臨床心理学研究 12, pp. 65-71